

---

# リボーンの世界へ（仮）

マデイラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リボーンの世界へ（仮）

### 【Nコード】

N6936Y

### 【作者名】

マデイラ

### 【あらすじ】

猫を庇い轢かれた少年がいた。轢いた車の主が歩いてくる方を霞む視界で視ると・・・白いスーツ？あれ？そっち関係の人？しかもそのスコップは何？・・・可哀想な少年に神の慈悲が。転生することになるが、なぜか地獄逝き・・・頑張る少年の物語。

## マフィアばい人に殺されて

とりあえず自己紹介。俺の名前は中島秋人。

中学の制服がここまで似合わない人がいるのかという見た目・・・

OTZ

自己嫌悪に陥りながら学校を目指す。

「あゝ・・・どうやってグレようか・・・」

この悩みの原因は先輩とか先輩とか先輩とか。その見た目で真面目な中学生？何言つてのお前？ワロスwwwとか言われ続けたため・・・

・あの先輩いつか顎で使ってやる。

信号に捕まりどうでもいい事を思いながら信号が青になるのを待つ。

「あ？」

ふと気付く。一匹の猫が道路を横断しようとしている。歩行者信号は赤だ。その時、高そうな車が走行してきた。スピードは一向に落ちることなく猫に向かっていく。

「やっべー！！間に合えよオイ！！・・・そらよっ！！」

猫にダッシュで近づき猫を蹴り飛ばす。手荒いが仕方ない・・・助かるんだから。

「あ・・・俺がダメじゃん」

体に衝撃が襲い、クラクションの音が響いた。

体が熱い・・・致死傷は体が熱くなると聞いたことがある。

頭がぼんやりする中、そんなことを考える。

車から人が降りてくる音が微かに聞こえる・・・救急車呼んでくれないかな？

「ちっ！！この糞ガキが！！車に傷が付いてるじゃねえか！！！どうしてくれんだ！！」

・・・死にかけてんのに暴言はかれた。憎たらしいその男の顔を覚

えておいて呪ってやろうと霞む視界で視る。

・・・白いスーツにグラサン、金びかのアクセサリ、顔に切り傷。それにハゲ。

こいつ絶対人殺したことあるよ！マフィアだよ！

「俺の車に傷つけやがってくれてよオ。・・・こいつ殺して内臓売るか。顔潰して指紋焼いて樹海に埋めとけば大丈夫だろ。・・・さあ、やるか」

その声とともに俺にスコップが振り落とされた。

「・・・あん？ここは？」

目が覚めると白い空間にいた。

「ここは神界じゃ」

・・・変な爺さんが声をかけてきた。短パンにタンクトップ・・・リーゼント。

「あ・・・もしもし〇〇病院でしょうか？急患がいます」

「やめんか！！わしは精神患者ではないぞい！！」

「・・・ちつ。んで、あんた誰や？」

胡散臭い患者の疑いがある爺に声をかけた。

「（舌打ち！？）ワシは神じゃ」

「一遍死んでしまえ」

「なんでじゃ！？」

誰だってそうなると思うんだが。

「うつさい、黙れ。んで、なんで俺はここにいいの？・・・妄想変態神」

「ひどい・・・。オホン、簡潔に説明するぞい。お主がものすごい死に方したからな。友人の閻魔がお前の死に様を見ての。・・・お主を気に行ったんじゃ。」

ええ・・・死に方氣にいるって；；さすが、この爺の友人。感性が歪んでる。

「とゆうわけでの。閻魔のところに逝け（笑）」

爺の一声により、俺の足元が空洞になった。

「覚えていろオ！！必ずテメエを殴りに舞い戻ってやるう・・・」  
ドップラー効果を残し堕ちていった。

冥界 in 秋人

「おぐう・・・あの爺。地面が固いのを先言つとけよ・・・。あん？なにここ？」

秋人が見たのは魂が長蛇の列になりながらあるところに向かっている光景だった。

「秋人さまですね？」

列に身を任せながら進んでいると、赤い鬼に話しかけられた。

「ああ、そうだけど？」

「こちらです」

赤い鬼に連れられ執務室のようなところに通された。

「あら？お客さん？」

キヤリアウーマンというべきだろうか？それとも女王様というべきだろうか？・・・姐さんと呼ぼう。

「・・・変なこと考えなかったかしら？」

「全然。・・・それよりここに呼んだのは？」

この姐さんエスパーか？

鬼が話を進めたそうにしていたので先を促す。

「そうでした。この方が秋人さまです。」

「ふん・・・そう。行つていいわよ、赤鬼君」

女がこちらに興味深そうに見つつ、赤鬼を退出をさせた。

「まずは自己紹介ね。私があなたを呼んだ、閻魔よ」

「ああ・・俺は秋人だ。それより・・・なんで俺を呼んだんだ？」

「簡単なことよ。私のヒ・マ・ツ・ブ・シ・」

「ぶち殺すぞ!？」

「怒らないでよ。死んだのに生き還るかもしれないんだから」

「マジで!？」

「そうよ。この世界に転生してあることをするのよ」

閻魔様（尊敬を込めて）はそういい、あるものを取り出した。

「・・・リボーンの漫画？」

家庭教師が最強の殺し屋で赤ん坊。ダメダメな主人公を矯正し立派なマフィアのボスにする物語だったはず。

「そうよ。私これ何度も読み返すほど好きなんだけどね」

「それで？俺をそこに転生させる理由は？」

「六道骸っているじゃない？」

ああ、あの体に六道全ての冥界を廻った記憶が刻まれているとかいうナポールの精か。

「それなんだけどね？あつちの世界の冥界と私の冥界・・・どちらの方が醜く残酷で凶悪であるか気にならない？」

「いや気にならないです!」

おkといえば死亡フラグだ!!

「だからね、思うの。私の地獄を刻み込まれたあなたと向こうの世界の冥界の記憶を刻まれた骸・・・戦わせて勝った方の冥界が醜く残酷で凶悪であるかが分かるんじゃないかなって」

こちらに妖艶な表情で閻魔がにじり寄って来た。

「いやいやいや！嫌ですよーそんなの！なんで冥界体験しなきゃなんないですか！それに骸とかはツナ君にまかせたらいいでしょうが!」

「ダメ。あなたに拒否権はないのよ?・・・だって私の気が治まらないでしょ?・・・それに、久々にイイ断末魔が聞けそうなんだ

もの」

この女！ドSだ！

「フフフフ・・・楽しめましょ？冥界を全部体験できるなんてそうないのよ？」

「お助け・・・赤鬼の人・・・」

閻魔さまは嬉々とし、俺を引きずりながら、執務室を後にした。無情にも俺は赤鬼さんに助けを求めることしかできたなかった。

## マフィアばい人に殺されて（後書き）

地味に更新していけたらなあと思いました。

自分の中では六道輪廻VS輪廻眼x万華鏡写輪眼でいいかなと思いまして……

いい能力があれば教えて下さい。匣兵器にスサノオは持っていきたい。



## 六道輪廻の果てに前篇

死後の世界からこんにちは 秋人です

今俺は閻魔に拉致られ荒廃した場所に来ていた。

「さ、始めるわよ！今からあなたに餓鬼道、畜生道、人間道、地獄道、修羅道、天道の順に冥界を刻み込むわ。」

閻魔が豊かな胸を張りながら声高らかに言い放つ。

「もう勝手にしてくれ」

投げやりになりながら俺は言った。誰か俺の冥福があらんことを祈っていてくれ……。

「ふーん．．．まあいいわ。そんな態度でいられるのも今の内だから。赤鬼君、青鬼君しっかり捕まえておくのよ?」

「御意」

閻魔がそう言うのと逃げる間もなく鬼達に取り押さえられた。

おい！？何をやる気だ！？

「今からあなたに餓鬼道を刻むのよ」

閻魔が手に禍々しい黒い炎を灯しながらこっちに近づいて来た。

「おい！？その炎をどうする気だ！？」

「アセンブリ・イン・ユナイテッド」

禍々しく黒い炎を……俺の右目に押し当てた！

「あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
！  
！」

痛い痛いイタイイタイイタイイタイイタイイタイッ！！！！

今まで感じたことのない痛みが俺を襲う。

「フフフフフ　　イイ断末魔をありがとう　　久しぶりにゾクゾクしちゃったわ」

こいつに必ず仕返しをしてやる！と激痛に耐えながら心に誓った。

あれから暫く経ち、激痛と鬼の拘束から解放された。

「……………」

「あらあら。もう言葉を発するのもつらいかしら？ そんなんじゃ冥界をすべて刻み込むなんて無理よ？ 気を取り直して今からスキルの説明をするわね。餓鬼道のスキルは地獄の炎の召喚＜天照＞よ。使いは身体が覚えてるわね？」

閻魔がスキルの説明をしながら俺に近づく。…………フフフフフ。

コノウラミハラサデオクベキカ！！

「仕返しじゃコラッ！！天照！！」

気づけば閻魔に対して天照を発動していた。

地獄の業火が閻魔を焼き殺さんと浸食していこうとするが、

「フフ、危ないじゃない。でも無駄よ？」

閻魔を捉える前に炎の勢いが衰え消えてしまった。…………はい？

「不思議そうね？ 答えは餓鬼道のもう一つのスキル飢餓＜殲滅眼＞よ。このスキルは飢えているのよ…………。それも人生を賭して鍛えた技や血肉、死ぬ気の炎さえ喰らってしまうほどにね」

能力を黙っていたことより燃やせなかったことが腹立たい…………。

「…………不快な感じがするけどまあいいわ。次行くわよ次！」

「おう……………」

冥界・餓鬼道クリアー。後五つ。

~~~~~

## 冥界・畜生道編

「もうあなたには餓鬼道があるから簡単ね」

「はい？」

「畜生道は冥界の使役した生物の召喚よ。私が召喚するから技を奪

いなさい」

意外と簡単そうじゃん。でもこいつのことだ。持ち上げて落とすに決まっている！

「（・・・間違ってはいないわね）来なさい！大蛇！」

ポトツという音とともに普通の4倍はあろうかという蛇が落ちてきた。

「・・・おい。これだけか？」

「・・・ええ。でもあまり舐めない方がいいわよ？この蛇ちゃんとか・・・分裂して増えるし、斬られても再生するし。」

「それホントに生物！？生き物として色々間違ってない！？」

・・・形状記憶カメレオンのレオンみたいな生物と思っておこう。

「さあ！次行くわよ次！」

「早いなオイ」

冥界・畜生道クリアー。後四つ。

~~~~~

## 冥界・人間道編

「この冥界は醜く危険で歪な世界・・・。私が最も嫌う世界よ」

閻魔が顔を顰めながら言った。

「どうしてだ？」

「・・・人間は平和を謳いながら私利私欲のために争い遭って多くの血を流しているわ。大切な者が殺された時、復讐に駆られまた争いを起こす。争い遭ったのは誰？殺したのは誰？元をたどれば自分達じゃない・・・。もう誰も殺さない？約束は守る？裏切られた者の悲しみを考えたことがあるの？自分が裏切られた立場だったら憎いでしょ？裏切った者たちが。」

「・・・」

俺は何も言えなかった・・・。俺も人間。マフィアに殺された時、

俺もあいつが憎かった。だが、俺が殺した生き物たちは？当然、俺が憎かったはずだ。

「・・・醜く歪な世界。矛盾した人間……。この世界を現す人間道をあなたに刻み込むわ。」

閻魔がそう言い、俺に左手を向けてふった。

「歪め」

グニヤリと視界が歪んだ。

俺を中心に周囲十数メートルの空間がねじ曲がり、中心部に向けて一瞬で押し潰された。

硬いものが折れる音。人間の腕や足が、本来曲がるはずのない方向へ捻じれていった。

「どうだった？」

閻魔が愉しそくに聞いてくる。さっきまでの表情はなくなり、喜色が戻っていた。

「最高だったよ、色々な意味で」

体が曲がり、骨が砕けながら内臓を貫いて潰れる感覚を味わったよ・・・。

「この歪み、捻じれが人間道のスキル・・・歪く歪曲する魔眼>よ。」

「どんどん人間から離れていくような気がする。」

「気にしない気にしない！次行くわよ！」

冥界・人間道クリアー。後三つ。

~~~~~

冥界・地獄道編

「そついえばあなた？」

「あん？」

「あなたのクラスの佐藤「言うんじゃねーッ！！」あら、残念ね？」  
こ、ここいつ！俺の好きなこの名前を！！

「ふふふふ あなたの天使ちゃんを襲わせようかしら？どうしようかしら？」

堪ったもんじゃねえ！！ヤラレル前にヤレ！！

「捻じ切れる！！」

人間道・歪。俺が右手をふった 瞬間、閻魔の首が舞った。首から先の部分が千切れ飛び回転しながら落ちてゆく。

「なんでこんなことをするの・・・」

「・・・え？」

いつの間にか風景が変わり見慣れた教室になっていた。そして閻魔の首が・・・佐藤さんに代わっていた。

「なんでこんなことするの。信じてたのに・・・」

なんで なんで なんで なんで ナンデ ナンデ ナン  
デ ナンデ ナンデ

許さない・・・。

許さない 許さない 許さない ユルサナイ ユルサナイ ユルサ  
ナイ ユルサナイ ユルサナイ

殺してやる

殺してやる 殺してやる コロシテヤル コロシテヤル コロシテ  
ヤル コロシテヤル コロシテヤル

・・・あゝあゝ！！！！」

自分の足を燃やし正気を取り戻した。

「あら、意外に早かったわね？もっと時間がかかると思ったんだけど」

元の風景に戻り、閻魔が俺の前に立っていた。

「てんメエツ！お前燃やす！」

俺の餓鬼道が火を噴きます。

「怒らないでよ。今のが地獄道の内の一つだから」

「ゑ？」

今何て言った？地獄道の内の一つがどうか。嘘だよね？

「事実よ。これだけあるわ」

閻魔がそう言い、大量の巻物を広げた。

「うそーん（泣）」

巻物の中から地獄の刑罰が出るわ出るわ。黒縄地獄、堆圻地獄、叫

喚地獄、大叫喚地獄、焦熱地獄、鉢特摩地獄etc

「・・・OTZ」

「頑張つてね イイ断末魔を期待しているわ」

俺の地獄の刑罰が執行された。

「改めて思う！俺はテメエが嫌いだ！！」

地獄の刑罰から生還？した後、閻魔に会って開口一番にこう言った。

「どうしたのいきなり？何か遭った？」

「何か遭った？じゃねーよッ！ありまくりだコラッ！！」

根性焼き、プレス機、地獄ツアー。地獄ありえねえーよ。

ナポールの精がまだいい人間に思えたわ。

あいつの場合、蓮の花で拘束だったが、俺は・・・蓮の花を咲かせた（比喩表現で）

鉢摩地獄に落ちた者は、酷い寒さにより皮膚が裂けて流血し、紅色の蓮の花に似るといふ・・・を体験したからネ。

「そう、あなた、私のことが嫌いなね？」

「大が付くほどに」

「ふふ。分かったわ。戦いましょ、私と」

「はい？」

「勝ったら相手に対して一回だけ命令できる権利を得る条件でどう？」

この女に命令できる！今までのやり返しも。

「乗った！！・・・あ」

「フフフフ 何を命令しようかしら？あれもいいわね・・・これもいいわね」

「ヤバイ。マジでヤバイ。つい乗ってしまったが、負ければ大変なことになるな・・・。」

「oh」

後悔しても遅かった。すでに閻魔は上機嫌。戦うことは避けられそうになかった。

## 六道輪廻の果てに前篇（後書き）

どうしよう。いろいろやっちゃった感が。餓鬼道（笑）とかやりすぎましたかね。

天道がまだ決まっていらないんですね。一応考えてるのは直視の魔眼ポイものです。

他にいいのがありましたら教えて下さい。参考に致します。



## 六道輪廻の果てに後篇（前書き）

やっぱり戦闘嫌いですね。難しすぎる；

## 六道輪廻の果てに後篇

S i d e    秋人

どうも、やってしまった感バリバリの心境になっている秋人です

つい日頃の恨みがたたり、閻魔に暴言を吐いたことで賭け死合に発展してしまった。賭けたものは相手に命令できる権利だが・・・自分の命だと思っていいたろう。

「さあ！始めるわよ！殺意の貯蔵は十分？私に命を売り渡す決意は決まった？」

閻魔が意気揚々と近づいて来た。・・・手に禍々しい大鎌を携えて  
「おいイイ！？こっちは無手だぞ！？テメエだけ武器ありは卑怯だろ！？」

この女にルールはないのか？こっちは元一般人だぜ？地獄で多少戦い慣れたが。武器ありと武器なし。ライオンと兎だろこれ。

「戦いに卑怯もクソもないわよ。強い方が生きる。弱ければ死ぬ。生きたければ、私を殺してみなさい。もつとも、私を殺せなかったら・・・地獄を一からやり直したから」

あの地獄をもう一回受け直せだと！？

「酷い！テメエには人の心はないのか！？」

「あるわけないじゃない。だって私・・・閻魔だもの」

ドヤ顔が余計に腹が立つ。死合が始まったら覚えておけよ・・・。

「あ、それと。戦いに開始の合図はないわよ？生きるか死ぬかで今から戦いますよって言う人はいないでしょ？」

閻魔がそう言った時には俺の目の前まで肉薄し、大鎌で俺の首を刈り取ろうとしていた。

人間道による空間歪曲。俺との距離を捻じ曲げ、接近からの一撃必殺。

「ッ！！大蛇！！」

閻魔が俺の首を刈り取ろうと振るったのを仰け反りながら畜生道による生物の召喚　大蛇を盾にしながら後退し、回避する。

俺の首の首の身代わりとなった大蛇は、閻魔に首を切断されるが、大蛇の特性　超速再生と分裂をしながら、閻魔に襲いかかる。

「・・・咄嗟の判断にしては、良い動きをするわね」

閻魔は大蛇を12分割にし、餓鬼道<天照>を発動。再生と分裂を上回る速度で燃やし尽くす。・・・ごめん蛇君。

「お褒めに与りどうもっ！！」

地獄道・剣樹　地面から数多の剣が群れを成し、閻魔に襲いかかる。

閻魔は同じく地獄道・剣樹を発動　剣樹同士がぶつかり合い、破砕音とともに碎け散る。

俺は碎けた剣樹の破片を拾い上げ武器とし、閻魔が使ったように人間道を発動　閻魔に肉薄し、襲いかかる。

「！！」

閻魔が少し驚いた表情をしていたが、気にしない。少しでも油断すれば俺が死ぬ。

閻魔がそれを剣（鎌から変っていた）で応戦する。

激しい打ち合い。俺と閻魔の剣が火花を散らしながら激突する。

俺の斬撃を閻魔は紙一重で避けながら、俺の急所を狙った鋭い斬撃を繰り出す。

俺は餓鬼道<飢餓>を発動させ閻魔の動きを喰らい、閻魔の様に紙一重で避けながら、先ほどより鋭くなった斬撃を放つ。

「っ！！」

閻魔が俺の鋭くなった斬撃に一瞬怯んだ。・・・好機！俺はそう思

い、  
を發動していた。

S i d e 閻魔

私は面白く死んだこの男を生き還らせる条件として、骸との勝負に勝つことを条件に今まで六道輪廻を刻んできた。・・・この男にとってトラウマになるかもしれないが、私にとってのお気に入りの方法で。

この男の堪忍袋の緒が切れたのだろう。久しぶりに会った、私に向かって開口一番に嫌いだと言われてしまった。・・・少し傷ついた。私は次の冥界の条件にも都合がいいと思い、戦いをすることにした。・・・条件付きで。

この男なら話に乗るだろう、私に復讐という些細な嫌がらせをするために。それに、ヘタレだからあまりひどい事は出来まい。

私の思想道理、この男はそれに乗ってきた。・・・傷ついた分、それなりに虐めてやると思いながら。

それなりに虐めてやろう思っていたが・・・無理そうだ考えを改めた。

剣を握ったこともないド素人だった一般人が、この私と対等に戦うなんて。餓鬼道があるからという問題ではない。どれだけ飢餓で技を奪ってもそれを使いこなせるとは話が別だ。

思い当たる節が一つだけあった。等活地獄は殺し合いをする地獄。修羅道は終始戦い、争うとされる冥界だ。この男、いつの間にか地獄道を刻むときに修羅道も刻んでいたのではないか・・・と思ったのだ。修羅道のスキルは格闘く模倣からの超越だ。いくら技を奪ってもそれは元々相手の技であり、対処され易い。それを自分のものにし、十全に扱うのがこのスキルだ。自分のものとさえしてしまえば、相手は対処が難しくなる。・・・現に私が対処し遅れたように。

私が怯んでいたのを好機と思ったのだろう。私の得意とした喉元への突きを繰り出そうとしていた。私より様になっているのが腹立たしい……。

このままでは私が負けてしまう……！

秋人自身に使うのはさすがに気が引けた。だから秋人の持つ剣に向けて六道輪廻最後の扉、天道＜邪眼＞を発動していた。

天道を受けた剣は……塵となり消え去った。

「なっ!？」

秋人が驚いた声を上げる。……ごめんなさいね。負けたくなかったの。

「私の勝ちよっ!！」

私の勝ち!! 剣を秋人の胸を穿つように刺突。鮮血が舞った。  
私の胸から。

Side 秋人

「ゴフツ!……どうして……？」

閻魔が吐血しながら俺に聞いてくる。どうして自分の方がやられているの?と思っただろう。

「あんたが怯んだ隙に地獄道・無限回廊を発動。あんたが思う幻想の中に引きずり込んだんだよ」

閻魔を幻想の世界に引きずり込み、思い描く通りの世界を味わってもらい同じ殺し方をしてみた。

閻魔が天道を発動してくれたのは幸いだった。あれも喰らっていたらと思うと……震えが止まらない

「フフ……性格悪いわね……」

「あんたほどじゃないがね」

閻魔が復活するまで待った後、閻魔が言った。

「……で?私にどんな命令をするのかしら?」

なぜだろう？ここで変なこと言った瞬間、俺の首が飛ぶビジョンが幻視できる。

「あゝあ・・・そうだ！形状記憶力メレオンみたいな生物をくれ！」  
閻魔が武器を変えた時、いいなあほしいなあと思っていたのだ。

「そんなのでいいの？私の身体とか言うのかと思ったわ」

俺は変態かよオイ。

「はい。形状記憶蛇の蛇吉よ」

「ネーミングセンスがないがまあいいか。よろしくな、蛇吉」

閻魔に手渡された蛇　形状記憶蛇の蛇吉はクネクネ動き嬉しそうにしていた。

「今から転生させるわ。六道輪廻も刻み終わったことだしね。」

「おお！これで生き還れる！」

長かった！本当に長かった！冥界の地獄を耐えきった自分を褒めてやりたい！

「忘れないでね？骸との勝負。忘れたら地獄に落ちてる者全員であなをリンチするから」

「死ぬ気でその任務完遂しよう」

地獄に落ちてるもの全員だと！？応戦なんか無理だろう。なんせガードなんてしてんじゃねえっ！！とかいうぐらいの理不尽さんがたくさんいたからネ。

「じゃ行つてらっしゃい（笑）」

閻魔はそう言い、左手を挙げて何かに合図するように下ろした。パツコと軽快な音とともに俺の足元が開いた。・・・え？

「はっ！！やっぱクソ爺の友人だったかー！！・・・」

冥界に来た時と同じように落ちて行った。

## 六道輪廻の果てに後篇（後書き）

六道輪廻の設定とか書いた方がいいですかね？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6936y/>

---

リボーンの世界へ（仮）

2011年11月26日16時49分発行